

**「新しい東北」官民連携推進協議会
令和4年度 宮城県意見交換会（第2回）議事概要**

令和4年10月19日
「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

【日 時】令和4年10月19日（水）11:00～13:00

【場 所】仙台うみの杜水族館 レクチャールーム／オンライン

【出席者】（敬称略）

＜副代表団体＞（所属の五十音順）

株式会社七十七銀行／国立大学法人 東北大学／宮城県／一般社団法人みやぎ連携復興センター

＜主団体＞

仙台港周辺地域賑わい創出コンソーシアム

＜復興庁＞

復興庁 復興知見班／復興庁 宮城復興局

＜事務局＞

株式会社 JTB

【議事概要】

1 開会

復興庁より、第1回意見交換会及びその後に各団体からいただいた意見を踏まえて、実践の場の案を用意した旨、また、事務局案について忌憚のない意見交換をお願いしたい旨、挨拶した。

2 各団体の活動紹介

宮城県と国立大学法人東北大学より、取組資料（資料2～3、冊子「Baton」）をもとに取組を紹介した。

3 令和4年度の実践の場企画案について

事務局より、資料1をもとに令和4年度実践の場の具体案について説明した。

4 意見交換

（1）目的の再確認／エクスカーションプログラム案に関する意見及び協力いただく団体

実践の場では、2）「語り部による震災の記憶」をテーマとしたプログラム案を元に、詳細な検討を進めていくことで合意が得られた。意見交換においては、エクスカーションプログラムについては、各々の訪問先を単発で視察する形になるのではなく、全体を通じたストーリーを固め、それに沿ったコースを組み立てるのが良いのではないかという意見が得られた。また、次年度以降は、各エクスカーションプログラムの対象となる層に合わせたテーマ設定や、他県も含めた広域でのプログラム検討を行う必要があるといった意見が挙げられた。

（主な意見）

- ・地元の人間として思うのは、旅行は旅行でも震災伝承の基礎がほしいということ。水族館において牡蠣の養殖の話を聞いてから松島に行くとか、そういう訪問先ごとのつながりをしっかりと含んだ上でエクスカーションプログラムを作るべきなのではないか。来場者がこのコースに乗ったときに何を感じて、私たちは何を伝えたいのかというところがつながるといいなと感じた。

- ・やはりストーリーという形でコンセプトがあり、単発で終わらせずに、参加した方が次の流れを作っていくような形にできたらと思う。例えば牡蠣の養殖1つを取っても、地元の重要な産業であり、震災時のフランスとの国際交流の話もある。そういったところを時系列も含めて、仕組みなどの情報も入れながら、現場に行って見るということもできるプログラムとする。また、宮城県は日本酒のラベル数が日本一多いので夜はお酒とからめて楽しむなど、一貫したプログラムを作つて、宮城の牡蠣をブランディングしていくようなやり方もできると思う。また、震災について、震災遺構とからめた形で1つのストーリーを作つていくこともできると思う。そういうものが人の心を動かして、継続的な流れを作つていくことができればいいのかなと思う。特にエクスカーションのツアーアであれば影響力を持った方々に何を伝えていくのかが重要になってくるので、ある程度ストーリー性を重視した方がいい。
- ・コースについて、1日で意外と遠くの施設に行って仙台に戻つてくるようで、距離感が気になる。地域やエリアごとのストーリーがあるので、地域を絞つた方が伝わりやすいのではないかと思った。地域の語り部をやっている人たちも自分の体験や自分のエリアのことは詳しく知つていて伝えようとするが、町全体のことは、なかなか伝えきれていないので、その辺をカバーするようなエクスカーションプログラムの震災の伝え方があつて、そこにいろいろなものが乗つかる形にした方がいいと思う。
- ・展示関係で言うと松島が一番わかりやすいが、意見が出ていた軸となるストーリーについて、組む形はいろいろあると思っている。例えば仙台市に126ある小学校の8割は水族館に課外授業で来ていて、小学校とのつながりも非常に強いので、ストーリーの組み方で言うと荒浜小学校とのつながりなども作つていけるのではないかと思う。ストーリー性はやはり重要なという気が強くした。
- ・来年のG7のタイミングでエクスカーションを組むときに、どういった方を参加想定しているのかがよくわからない。
- ・参加対象として誰を想定するかで変わつてくるかなと思う。例えばグローバルMICEであればG7になるが、仙台市は産業科学技術と防災環境都市と言つてはいるので、ナノテラスを見て終わりということはおそらくない。震災遺構などこういった内容も組み入れてあるに違いないと思う。
- ・G7とも関係したプログラムを検討するということであれば、仙台市としても別に何かしらの計画を進めているはずなので、連携して取り組むべきではないか。
- ・G7などの国際会議のメンバーを対象にするのであれば、来訪者は仙台や多賀城、福島ではなく日本という見方をするので、日本の中で何を見てもらうのかという観点で考えていかなければいけない。本当に震災の復興を伝えるとすれば、県単位で動いている「新しい東北」も、福島と宮城の共同でターゲットを絞つてやつていくことにして、福島の東日本大震災・原子力災害伝承館を回りつつ震災遺構である小学校を回るとか、そうした組み方をすると、海外から来た政府関係者にとってメッセージ性を持って受け取つていただけるかと思う。県で別々にやつてある座組を一時的に変えてやってみるという発想も必要かなと思う。
- ・仙台市の関与や県を跨いだ取組についても今後考えていきたい。また、仙台市内のみで終わらない広域的な地域に訪れるプランをやってみることによって、行政の担当者同士をつなぐ役割、また各地の観光協会をつなぐ役割として実践の場を機能させることは方法としてあるかもしれない。
- ・今回はあくまでもモデルケースとして1つ作つてやってみるという話と理解。視察のコースを検討する際に、コースがルーティン化されれば、もう少し伝え方を深めることができる。
- ・誰をターゲットにするかといった議論が出てゐるが、第1回を思い返すと、本来は震災で災害を受けた地域に人を呼び込んで観光消費につなげて賑わいを取り戻していこうというのが大目標としてあつた。ただ、まだ今は震災をネタにした観光というのは扱いに注意しなければいけないという話があり、エクスカーションプログラムから入ろうということだったと思う。そういう意味ではG7を対象にするというより、もう少し広く、それをやっていくことによってあるときから観光のツアーリーとして使える形に育つていくような視点で議論していくべきだと思う。その辺を事務局で整理さ

れると議論がしやすいのではないかと感じた。

(2) 実践の場（モニタリングツアー）にお招きする団体、ツアーバー後の意見交換の内容等

招請する団体については、宮城県、仙台市、仙台観光国際協会、不動産事業者、仙台で情報誌を発行している企業等が候補として挙げられたほか、地元の方にも入っていただいて意見を反映すると尚良いとの意見が挙げられた。招請団体への声掛けは主団体・副代表団体の協力を得ながら進めることとした。

(主な意見)

- ・ガイドができる人がいるのかな？と思う。地域のことを話せる方は結構いるが、震災のことを含めた形で何かやるというのは、今はいないと思う。資料を作つてそういう人たちを育成していくことが必要だと思う。
- ・ガイドをしてくれるかどうかはわからないが、仙台市内でいろいろな情報冊子を作つている会社が、震災復興や歴史・文化の特集を組んでいる。彼らに説明すれば、参加の可能性はゼロではないと思う。また、エクスカーションプログラムに地域の方々、地元の方々をお招きして、モニタリングツアーの中でその方々の持つ考えなどもヒアリングしてエクスカーションプログラムに盛り込んでいけたら、より深みが増すかなと思った。販売会社も地域に根差している部分はあるかもしれないが、深さは地元の人には敵わないと思うので、そういう方の意見を反映させることもプログラムを良くしていく上では重要ではないかと思う。

(3) 目標達成に向けて副代表団体として支援・関与できること

今年度の実践の場や来年度以降の取組を見据えて支援・関与できることについて、各副代表団体より説明した。

(主な意見)

- ・次年度以降に実際にルート拡充をやるのであれば、現地で活動している団体や個人のネットワークがあるので、紹介するなり、来年以降のルートに組み込んでいくときのアドバイスはできる。
- ・支援団体については、災害支援だけではなく被災者の心のケアや地域の生業の支援といった取組を色々やってはいるので、これから出てくるテーマや方向性によって参加団体として加えることはできると思う。
- ・せっかく仙台港周辺地域賑わい創出コンソーシアムの皆様に入つていただいているので、エクスカーションプログラムも含めて賑わいをしっかりと作りたいという想いがある。緑化フェアがあり、緑地もできるという話だが、この契機にしっかりと賑わいをここに残したいし、ここに来た海外の方々が各地の伝承施設に行っていただければなお良いと考えている。

(4) 今後のスケジュールについて

事務局より、今後のスケジュールについて説明した。最終的な日程については、事務局において訪問先等とも調整の上、決定することとした。

5 閉会

今回の議論を踏まえ、実践の場で行うプログラムについて事務局で更に具体的な検討を進めることとした。実践の場に招請する団体については複数の推薦を得られたため、今後は事務局で調整し、主団体・副代表団体の協力を得ながら声掛けを進めることとした。

以上